

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

## 特集私たちのみた世界 : ニュー・ヨークの 明暗

梶山, 政子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

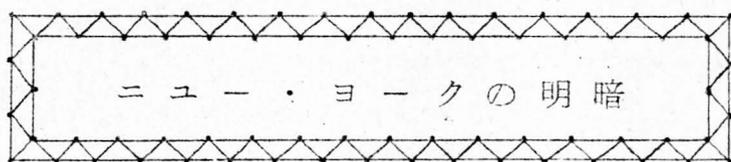
67

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

1967-03-21



ニュー・ヨークの中心地マンハッタン島、そのなかほどより少し北のハンドレッド・テンス・ストリート(110通り)。それもブロードウエーのすぐ近く、こんな地点の庶民的アパートの一角に居を定めたことは、私の1年近くのニューヨークの生活をいろいろの意味で豊富なものにしてくれた。いいにつけ、悪いにつけ……。

「110通り」というのは、マンハッタン島を東西につらぬく規則正しい通りのひとつには違いないが、道巾は広く、一晩中バスは通る、トラックは通る、救急車はりなるでやかましいことの上ない。地図をみれば想像もできようが、セントラルパークの北端にあるこの通りはフィフス・アベニューを通る何本ものバスが必ずここで左折する。こんな事情もよく調べずに住みついた自分も全くうかつであつた。

110通りに直面した、昼なお暗いアパートの3階で私は騒音から、まず不眠になやまされた。つづいて食欲不振におちいり、消化不良にもなつた。仕事をする意欲もなくした。たてつづけの不調で研究はおろか、日常の仕事も全ておつくりになつた。衝を見物する元氣も勿論ない。一種のノイローゼだろう。この事を人に話したら、日本人がはじめよくかかるノイローゼだろうから、大いに遊ぶことが大事ですよといわれた。

それからというもの、私はつとめて外に出るようにした。時々ニュー YORKの銀座通り、有名なフィフス・アベニュー(五番街)にもでかけたりした。

**世界の中心地フィフス・アベニュー** アパートのすぐ近く、ブロードウエーの110通りから地下鉄にのり、ダウントウンの中心地タイムズスクエアに出た。ここの42通りをイーストリバーに向つて、つまり国連ビルの方向にあるくと間もなくフィフスアベニューにぶつかる。このあたりのフィフスアベニューは世界の流行の中心地、美しい建物が軒をならべている。サックス、ベスト・アルトマン等、世界に名の知れた高級店も少なくない。私は目をみはつた。ウィンドウをのぞいてみただけでも千ドルはおろか2千ドルを越す品物すら稀ではない。高級婦人服、アクセサリ、ハンドバッグとみればほしいものばかりだが、ウィンドウショッピングでがまんした。



ニューヨーク市

繁華街のまんなか50通りにはセントパトリック寺院の古びた大がらんがあるかと思うと、斜め向かいに超近代的なロックフェラー・センターの建物が立ち並ぶ。このあたりを歩きかう人々の数は実におびただしい。スタイルブックから抜け出してきたようなモダンな、時には奇抜な婦人達も少なからず目に入るところ。

ファイブスアベニューのおとなりは、これまた有名なマヂソンアベニューだ。ファイブほど豪華ではないが、もつと高くてこつた品物を売る専門店も多いときく。フォーマル過ぎずくずれすぎず、なんとなくあかぬけしたかつこの紳士をマヂソンアベニュースタイルと呼ぶという話もきいた。

た。

私はファイブスアベニューを楽しんで57通りからバスにのつて帰途についた。バスの右側に並ぶ美しいアパート群は、左側のセントラルパークをまるで庭園のように見下している。ここに住む人達はアメリカ屈指の富豪とのこと。アメリカ映画にでてくるデラックスなアパートの生活はこの辺りのことかもしれない。室内は完全に電化されて、最先端の文明生活をエンジョイしている。まもなくセントラルパークは終り、バスは左折して西にハドソン河に向つて走る。私は“おや”と思つた。わずかに数分の間に窓外の景色は全く変つてしまつて別世界のようだ。またないアパート、窓々にほされるおびただしい、きれいとはいえない洗濯物の陳列。“洗濯機も乾燥機もないのか？”それにアパートはまるで廃きよのようにみすばらしい。こんな建物がつぎつぎと窓のそばを過ぎる。これぞ世界に有名な“ハーレム”地区の南端である。この110通り、歩く人も黒人が多い。そのせいかバスを乗降りする人も色が黒い。美容院のウィンドウをかざるマネキンも色が黒い。

ここで高度の文明生活の矛盾が生みだした貧困の典型をみせつけられたような気がした。一口に“文明”といつても、その持つ意味をいやという程、味あわされた。やがてバスはコロンビア大学の近くのアムステルダムアベニューを横切り、わがアパートの前を一走りしてブロードウエーの大通りにでる。私はバスをおりた。

ファイブスアベニューをうめる反戦大デモ

秋のある土曜日の午後、ファイブスアベニューのセントラルパークにそつてベトナム戦争反対の大デモがあつた。私はパークのベンチに陣取つて、早くからデモ隊の到来をまつた。1時に出発したデモ隊は、大部おくれ2時近くにやつとあらわれた。先頭は赤や黄や緑のペンキを衣服にぬりつけ、おどけた顔に微笑をたたえた老紳士だ。これはあとからきいた話だが、右翼にペンキや卵をぶつけられた為だとわかつた。この老紳士こそ最近おしく

も他界されたマスト牧師であつた。

つぎつぎと続くデモの列は多種多様な人びとで構成される。無造作な背広の男。ハイヒールをはいたおしやれな婦人。ベトナム僧侶にふんそうし、がい骨をかついだり鐘をたたいたり学生意、ギターをひきひきフオークを口ずさむ若者の群れ……。私は余りにも風変りなデモに多大の好奇心をよせた。もつとおどろいたことには、車椅子に乗つた病人も何人かまざつてゐるではないか。一瞬、心がひきしまる。それから、さつき私の前を一人で歩いてゐた豪華なビーズの帽子の貴婦人もいつの間にかデモに加わつてゐた。

一方、右翼が2~3人立ちふさがつてデモ隊をのりしる。「お前達はそれでもアメリカ人か?」「あたり前だ。私は真のアメリカ人さ」。一人のおばあさんが、こぶしをにぎつてどなりかえした。やりとりは次々とつづく。

デモ隊はこんな調子である。職業をこえ人種をこえて、イデオロギーをこえて、老いも若きもベトナム反戦というこの一点に結集した全く素晴らしいデモだ。私は正直いつてこのアメリカにこんなたくましい底力があるのかと、少々舌をまいた。

だが、2週間後の土曜の午後、同じファイフスアベニューで、こんどはベトナム戦争賛成デモもあつた。在郷軍人が中心となつて組織されたものようだ。まつたく面白いところである。

**黒人の生活と、死亡の特性** 反戦大デモをみてから私は何んだか元気づいた。ニューヨークを知ろうという意欲も、アメリカの季節病の研究をしようという意欲も旺盛になつた。アパートの生活にもなれてくると、この使用人とも仲良しになつた。住んでる人は殆んど全部が白人なのに、使用人は3人とも黒人——ニグロ1人、プエルトリカン2人——みかけは一寸こわいが、話してみると実にお人良しである。スーパーもニグロである。

毎朝、物すごい音をたててやつてくるゴミ集めの自動車に、アパート2棟、150世帯分のゴミをのせる仕事は彼等の日課の一つだが大変な労働である。12階もあるアパート全部の廊下と、一階のロビーのそうじ、床みがき、時にはペンキ塗り、故障箇所の修理、暖房用の地下の大きなボイラーたき……。まだまだ仕事は山程ある。でも時には息抜きに、近くの黒人達と道路で面白そうに話しこんでゐる事もある。なんとなく元気がないのも共通点のようである。黒人としてのコンプレックスのせいだろうか?

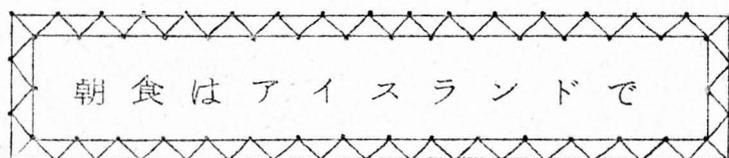
ある寒い日、3人のうちの1人、ハーレムから通つてゐるPさんが、いかにも疲れた様子でゴミを取りにきたのできいてみたら、「胸がいたくて 肺炎らしい」といつた。それがらしばらく休んでゐたが半月位たつたある日、しょんぼりとロビーの床をみがいてゐる姿をみかけた。「大丈夫なの?」と声をかけると「ドクターはまだねてないよ駄目だというけれど、生活のためにはそうもいれない。高い注射もしなければならぬし」とぼやいた。私の胸も強く痛んだ。たしかに彼は過労だ。そして貧しい。これでは病氣にもなる。私は身近かに経験していろいろと考えさせられてしまつた。もしかしたらこんな悪条件が幾つも幾つも集約されて、黒人の死亡の季節変化は白人とは違つてゐるのではなからうか? 私はフトこんなことを考えた。

あれこれと死亡統計をいじくつてゐるうちに、果せるかな人種の差は歴然と出てきた。まずラフ

な統計だがアメリカ全土の総死亡の季節変化をみると、白人は冬にだけ死亡の山を持つが——これは現代の日本や英国と同じタイプ——黒人は冬山のほかに、夏にもにぶい山を持つ。これは私の説からすると後進型タイプなのだ。丁度日本の戦前のタイプ。またアメリカを州別にみても、歴史的にみてもこの事はたしかにいえる。でも現在みられる黒人の夏山も、昔はもつともつと高く時代とともに低下してきた事は事実である。

ニューヨーク市の白人、黒人の季節変化を示す統計がないのは残念だが、ハーレム地区の乳児死亡率がほかの地区よりずばぬけて高い——出生千人についてハーレムは40人前後の死亡率、他の地区は20~30人の死亡率——ことからみても、季節変動のタイプはおそらく後進型ではなからうか？ ニューヨーク市の統計局で働く黒人の女子職員に“ハーレムの乳児死亡率はどうしてことう高いのでしょうか？”とさりげなくきいたら、すかさず“ボバティー”、この一言はいまだに私の脳裏から消え去らない。

法政大学文学部講師 榎山政子



## I

西洋風の朝食、それは列車食堂でお目にかかるあのトースト・ハムエッグ・コーヒー（紅茶）の類だと日本では一般に信じられているようだ。それどころではない。これを真似ることが文化的だの、進歩的だの、健康的だのと大つびらに宣伝したり、何も知らない子供に家庭教育をしたり、内心ひそかに自慢してすべての劣等感をこれで埋め合わせたりする明治100年ならぬ「明治100年族」が跡を絶たない。

所がである。まずヨーロッパの朝食をやや皮相的だが、ホテルのそれで一寸眺めて見よう。ロンドンの安宿（1964年冬に朝食付1週間8,000円）でも、その朝食はコーンフレーク1碗、トースト4枚、ハム（ベーコン）エッグ一皿か焼ソーセージ一皿又はひらきにしんくん製のバターいため一皿、バターが3×5×1.5cm位、マーマレード小カップ1杯、砂糖中カップ1杯、紅茶かコーヒー1ポット、ミルク大カップ1杯は4ヶ月間少しも変らなかつた。これだけあると余程の大食漢でない限り朝一遍には食べ切れない。私は——話がみみつちくなつて恐縮だが——食事が個室に運ばれて来るのを幸い、ホテルで仕事を続ける日には前日の買い置きと合わせて昼食もこれで済ま